

# 姫神の裔と鏡の伝説

鏡ヶ原遺聞 参ノ巻

天堂里砂

*Risa Tendo*

## 立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

### ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶(次ページ)をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

口絵・挿画 ひだかなみ

目次

妖怪ケ原と人魚

7

妖怪ケ原と魔鏡

123

あとがき

244



さ え き ち づ る  
佐伯千鶴

たちばな しゅう いち  
橘 秀一

たか はし と も や  
高橋智也

よこ やま すず か  
横山鈴花



# 鏡ヶ原遺聞 登場人物



さ え き さ く や  
佐伯咲耶

さ え き な ぎ こ  
佐伯雛子

さ え き ま さ し  
佐伯正志



人魚



み さ き ひ さ よ し  
美崎久美

たか はし よう こ  
相橋陽子



ミヤビ

タビ

しんくし  
神宮寺

イモリ

コダマ

ジロキチ



鬼

しえい  
慈英



山姥



姫神

ホンジ

マヒト



妖怪ヶ原と人魚





## 一章

ぼちよん、ぼちよんと、水滴の落ちる音が聞こえる。

——寒い……。

——凍えそうだ。

ほんやり目を覚ました秀一は、なんとか身体を動かそうとしたが、指先がぴくりと震えただけだった。

——ここはどこだろうか。

はつきりとしなない意識の中で記憶を辿る。

川沿いを歩いていたら、水の中に引きずり込まれたのだったか。けれど、その先のことはよく覚えていない。

——おそらくアレが、このところ町を騒がせて

いる犯人なのだろう。

——アレは一体、何だったのだろうか。

あまりの水の冷たさに、思考も麻痺していく。考えても何も思いつかない。頭の芯がじんと痛む。身体が熱を持っているようで、余計に寒さが身に染み

——寒い。

——さむい。

——さむい……。

\* \* \*

十一月。街路樹が色づき葉を散らせる秋は、何となくもの悲しくなる季節だ。都会から電車で数時間もかかる、この四方を山に囲まれた田舎町にも、いつの間にか木枯らしが吹き始めていた。

夏にこの町へ引っ越してきた橘秀一が、『清和高等学校』へ転入して早一ヶ月半。

高校生活にはすっかり慣れた秀一だったが、今日は郷土史研究部の部室で溜息をついている。

日が暮れるのが早くなり、五時前だというのにすでに外は暗い。そのせいで、頬杖をついてぼんやりしている少年の姿が、窓硝子にはつきりと映っていた。

どこかまだ中性的な印象を残した顔立ちの少年が、伸びすぎた前髪に隠れた眉をわずかに寄せている。男子にしては柔らかな目元のせいだろうか、秋が深まる前に十六歳になったのに、あまり男らしくないのが、彼の目下の悩みだ。

田舎へ越してきて四ヶ月が経ち、毎日の運動量は以前の三倍になっている。けれど体格はひよろりと細いままだ。残念ながら、街暮らしの頃とちつとも変わらない。

ただ、父と暮らしていたときより、表情は豊かになった。以前ならば悩みを抱えていても、無表情の仮面の下に隠していたに違いない。

悪いことではないが、高一男子としては、表情よりも逞しい筋肉が欲しいところだ。

そんなことを考えつつ、秀一が鬱々と自分観察をしているのとは対照的に、部室内は異常に盛りあがっていた。

主に一人だけが。

「河童さんはね！ 人間に悪いことをする妖怪じゃありません！」

あまり広くない部室内で拳を突きあげ、熱弁を振るっているのは、ショートボブの髪を綺麗な茶色に染めた横山鈴花だ。机を挟んだ秀一の向かいの席で立ちあがった彼女は、見た目は小さくて可愛らしい小動物系の少女なのだが、妖怪が好きだと言ってはばからぬ変わり者のクラスメイトである。

鈴花は小柄なわりに大きな胸を反らして叫んだ。

「これは『妖怪研究部』としては、声を大にして訴えなければならぬ、由々しき事態なのです!! ちよつと、みんな聞いてるの!?!」

「ああ。……正式名称は『郷土史研究部』だけどな」  
涼しげな少女の聲が、少年のような口調で鈴花の  
発言を訂正した。

「聞いて欲しいのはそこじゃないし！」

びしっと鈴花が指さしたのは、部屋奥にある本  
棚の前で佇んでいた黒髪の美少女だった。

うつつとうしそうに掻きあげる長い髪はつややかに  
輝き、色白の顔を縁取っている。切れ長の目と筆  
で書いたような形の良い眉、そして薄い唇が、ど  
ことなく日本人形のような雰囲気醸し出していた。

彼女は流れるような所作で歩いてくると、秀一の  
斜めに腰を下ろす。そして鈴花を尻目に、黙々と  
読書を始めた。この少女こそ通称『妖怪研究部』正  
式名称『郷土史研究部』の部長、佐伯千鶴である。

彼女の向かい——秀一の隣の席には、眼鏡をかけ  
た真面目そうな男子生徒が座っている。彼の意識も  
手元の参考書に向かっており、この部屋にいる誰も  
鈴花の話をきちんと聞いていないようだった。

部室内のテンションに納得いかない様子で、鈴花  
が唇をとがらせる。その拗ねた表情に気づいた眼鏡  
男子——鈴花の幼なじみの高橋智也が、慌てて参考  
書から顔をあげた。

「鈴花ちゃん、僕はちゃんと聞いてたから！ 最近  
『男性が川に突き落とされる』って事件についてだ  
よね？」

「そうよ！ さすがトモくん!! その事件の犯人を  
みんなが『河童』さんだって言ってるの。酷い。こ  
れは酷いよね!! だって河童さんは、溺れた美少  
女! つまり私を助けてくれたんだよ!! 悪い人じ  
やないもん！」

「人じゃないけどな」

冷静な千鶴の突っ込みを、鈴花はあっさりとスル  
ーした。

彼女が熱く河童を弁護しているのは、こここのこ  
ろ町で発生している事件の『犯人』と噂されている  
からだ。同様の事件はすでに五件ほどになる。

被害者たちは川や水路沿いを歩いている途中、呼び寄せられるように水辺に近づいたところで足をつかまれ、水の中へ引き込まれるらしい。本当なのか、思いこみなのか、被害者たちは口を揃え、「女のように細い手の感触だったような気がする」とか「髪が長かったような気がする」と言うのだそうだ。ちなみに被害者は今のところ全員男性である。

さらに川に落とされてびっしょり濡れる以外、特に何もされないそうなのだ。気づくと一人で水の流れの中に立ちつくしている。それだけの事件だ。

しかし誰一人として犯人を見た者がいないらしく、最初は噂ばかりが一人歩きしているような状態だった。

草に足を取られて川に落ちたのだろうとか、酔っぱらって足を滑らせたのだろうと言われていたが、さすがに四件、五件と同じ事故が続いたことで、新聞も事件として記事に取りあげるようになっていた。事故とも言い切れなくなったのだろう。

目的が分からないだけに、地元の人たちは極力川辺を避けて歩くようになっていたのだが、犯人の目星は未だついていない。

最近では「河童でも出るんじゃないのか」という冗談めかした噂話さえ流れ始めていた。

本当に河童がやったとは誰も信じていないのだが、河童ラブの鈴花には、河童に対する濡れ衣も悪口も許せないのだ。それで、毎日のように部室で吼えるのが習慣となつていく。

「私の河童さんは悪い人じゃないのにい〜」

「もちろん。河童は犯人じゃないよ。僕は鈴花ちゃんの味方だからね」

「トモくん！ やっぱり分かつてる！ ね、千鶴ちゃんもそう思うよね？」

「ああ、そうだな」

どうでもいいように千鶴は同意する。そしてどう秀一にも飛び火してきた。

「つていうか、橘くん！ 聞いてるの!?!」

「……うん？」

「もしかして、聞いてなかったの？ 信じらんない!!」

気がつくつと、悩んでいるような状況ではなくなっていた。

両の拳を振りあげて怒る鈴花の背後に、めらめらと燃えあがる炎が見える。秀一は慌ててこれまで聞き流していた話を思い出した。

「あーえーつと。犯人が河童だとかいう話だっけ？」

「河童じゃないって話よ!!」

「ああ、そうか。じゃあ、なんか他の妖怪なんだろう。濡女ぬれおんなとか、長い髪が濡れてる女の妖怪じゃなかったっけ？」

秀一が口にした言い訳が鈴花は気に入ららしい。「でしよでしよー？ だから河童さんじゃないんだってば！」

人差し指を突きあげる鈴花に、

「この辺りで河童の昔話はあるが、濡女は聞いたことがないな。確率は極めて低い」

と、千鶴が余計なことを言う。

「千鶴ちゃんは河童さんと私の味方なの!! 敵なの!?!」

「それほど大げさな話ではないだろ？」

ふう、と千鶴は溜息をつき、秀一はその隣で頷いた。

あくまでも、心の中で。

「橘くんは河童に会ったことはあるの？」

「あ、はい。何回か話したことがあります」

部活を終えた秀一は、千鶴を迎えに来た彼女の兄、咲耶さくらやに訊ねられて頷いた。話題はもちろん、鈴花が熱弁していた事件と、その噂のことだ。

千鶴は秀一が居候している照覚寺しょうかくじに近い、加我かが美神社みの娘だ。『郷土史研究部』に入部してからず

つと、秀一は彼女と一緒に、咲耶に高級外車で朝夕送迎してもらっている。

咲耶は県内の大学に通っているらしい。顔立ちは千鶴とよく似ているが、常に穏やかな微笑みをたたえている。その甘いマスクは、いつも女生徒たちの噂の的になっていた。

すらりと背が高く、どんな服でもモデルのように着こなす。秀一から見ても、彼はかなり格好いいので、女子が騒ぐのも納得できた。

「それで、橘くんとしては、河童の仕業だと思っかい？」

バックミラー越しに話しかけてきた咲耶に、秀一は首を左右に振った。

咲耶は「河童の存在を信じるのか」ではなく、「会ったことがあるのか」と問うた。秀一が彼からの突拍子もない質問に、動揺することなく頷けたのは、秀一が人ならざるものを視ることを、彼も千鶴も知っているからだ。

「いいえ。あいつらじゃないと思います。少なくとも俺が知っている河童はそんなことはありません」

鏡ヶ池には確かに河童が棲んでいる。しかしそこに棲む河童たちは、気のいいものばかりだ。昔は人間に悪戯を仕掛けることもよくあったらしいが、最近は何もしていないと言っていた。

秀一は後部座席に放り出されている新聞を手を取った。千鶴を待っている間に咲耶が読んでいたものだろう。地方欄を一番上にして、折りたたまれている。

秀一は新聞の隅にある見出しへ目を向けた。

——『用水路へ落ちた男性が軽傷』……か。

被害者はこれで六人目になり、さすがに警察も事故とばかり言っていられなくなったようだ。そこには警察が捜査中と書いてあった。

それでも大きく取り扱われていないのは、重傷者がいないことと、悪戯されているのが女性や子どもではないからかもしれない。

「千鶴はどう思う？」

「私も河童ではないと思う」

鏡ヶ池は千鶴の実家である加我美神社から徒歩数分の距離だ。彼女がかつて河童に会ったことがあつても不思議ではない。

彼女も秀一と同じように、人外のものを視ることが出来る。しかしその力の差は大きく、秀一のようにはつきりと視ることはできないらしい。

ここ、鏡ヶ原と呼ばれる地には、《神眼》を持つ者が多く生まれる。《神眼》とは、人ではないものを視る目のことだ。鏡ヶ池におわす姫神から与えられた目という意味なのだそうだ。

秀一の父方である美崎の家系は、カガミと呼ばれる巫覡の直系で、特にその力が強い。千鶴が生まれた佐伯家は美崎の傍系にあたり、美崎家とは何度も婚姻を重ねて血を濃く残している。だから同じような力を持つ子どもの生まれる確率が高いのだ。千鶴は秀一の又従兄妹でもある。

「それなら、河童じゃないんだろ。できれば妖怪であつて欲しくもないけれど」

咲耶がぼつりと漏らす。

元から力の弱かつた彼は、もう視えないのだそう。その分、力が強い祓魔師の妹のことを気にかけている。

千鶴が「甘いことを」と言いたげに鼻で笑つて口を開いた。

「被害者は皆知り合いでもないようだし、奇妙な事件であることはたしかだ。他の妖怪が関わっていないとは言い切れん。まあ、解決してみれば、男に振られた女の逆恨みだつた、というオチかもしれないが」

秀一にしてみれば、至極真つ当な千鶴の意見のところが、妖怪よりも怖いような気がする。

「それなら絶対に関わりたくない……」

「俺も御免かな」

げんなりと呟いた秀一に咲耶が同意する。

「結局、妖怪なのかもしれない」

千鶴の言葉に、秀一は窓の外へ目を向けた。街灯がいでんとうがどンドン後ろへ流れていく。

「そうだな……」

弱い同意の言葉に、千鶴が軽く振り返った。

「妖怪のせいばかりにするな、と言わないのか？」

秀一は、言い返そうと開いた口を閉じた。

彼女の言うとおりに、以前の自分だったら——これまで妖怪たちに助けられていただけの自分だったら——「何でもかでも妖怪のせいにするな」と言っただろう。人間同士の争いあらそのほうがか明らかに多いこの世界で、そんなに妖怪絡みの事件よゆうかいがらがあつてたまるかと思つていたのと、妖怪自体に悪い印象をあまり抱いていなかったからだ。

でも最近、そうとばかり考えられないことを知つた。この世には、百パーセントたしかなものなどないのだと思ひ知らされた。

——自分自身でさえ、信じられなくなることがあ

るのだと。

「妖怪にも、いろいろいるからな」

窓に映る自分の冴えない表情と見つめ合つたまま小さく答え、秀一は車が照覚寺の参道前さんどうまえに到着するのを待った。

「シューウ！ おかえりなさい！」

寺へ帰ると、真つ先に飛びついてきたのは木霊こだまだった。山に棲む悪戯好きの妖怪だ。照覚寺にあふれかえつてゐる妖怪の中で、一番秀一に懐なついている。

青い緋かすりの着物を着た二歳か三歳ばかりの少年の姿をした彼は、無垢むくな瞳ひとみで秀一を嬉うれしそうに見あげた。着物の裾すそから膝小僧ひざごろうを覗のぞかせているのが愛らしい。

「あのね、あのね。コダマ、せんたくたんだの。

えらい？」

「偉えらいい偉えらいい」

近頃木霊は褒められることがお気に入りらしい。

ぐいぐいと秀一のズボンを引つ張つて、次の手伝いを強請る。

「つぎは？ つぎはなににする？ なにしたら、えらい？」

「そうだなあ」

秀一が台所へ向かう間も、ちょこちょこ足下にもとわりついてくる。

木霊は難しいことを考えない。考えるだけの語彙を持っていないようだ。だから秀一に気に入られようだとか、何か下心があるわけではなく、ただ単純に褒められることが嬉しいのだろう。

多分……。

台所の土間へ足を踏み入れながら、秀一は木霊を見下ろした。

「じゃあ、ちゃぶ台の上を片付けてくれるか？」

「はい！」

元気に返事をした木霊は、嬉しそうにびよんぴよん跳ねて、廊下を駆けていく。思わず口元をほころ

ばせ、秀一はそれを見送った。

夏にこの土地へ引つ越してくると同時に、秀一は照覚寺の住職である神宮寺に雇われて、家事のアルバイトを始めた。父を亡くした彼を引き取ってくれた父の弟——叔父の美崎久美と、神宮寺が友人だったからだ。

初めは家事だけでも大わらわだったが、最近では家事と学校の両立にも慣れてきた。そのうえ部活にまで参加できるのは、彼の帰りがどんなに遅くなくても、時間を気にしない妖怪たちのおかげだ。

だいたい妖怪たちは食事をしなくても生きていくので、時間は何の問題にもならない。彼らは単に、食べるという行為が好きなのだ。その中でも特に、人間と同じ食べ物が大好きだ。

正直、洗濯や掃除も、彼らには必要ないのだろう。遅くなって大変なのは秀一だけ。部屋が汚くて困るのも秀一だけだ。

かといって、アルバイトとして雇われているから

には、やることだけはやらなければならぬという  
 思いから、どちらにも手抜きはしないつもりだった。  
 台所へ行くと、水屋みずやの上で猫股ねこまたのタビが丸くなつ  
 ていた。尾が二股に割れた黒猫で、足先だけが足袋  
 をはいたように白い。

彼はぴくりと耳を動かすと、ちらりと片目を開け  
 た。大欠伸おおあくびをしながら文句を言う。

「やつと帰ったのか。飯はまだか」

さっそく冷蔵庫を開けた秀一は、買い置きかき置きの鯖さばの  
 切り身を取り出した。時々知らぬ間に川魚が入って  
 いるときもあるが、それは誰かのありがたい差し入  
 れだ。

なので、タビも妖怪——というか猫らしく、自分  
 で自分の食べ物くらい狩かつてくればいいのだ。

「魚でもネズミでも捕とつてくればいいじゃないか。  
 いくらでもいるだろ」

「何？ 私に生肉を食べろというのか？ 野蛮やばんな」

「猫だろ」

「猫ではない。猫股だ」

どうも秀一には、その辺りの差が分からない。猫  
 股は人間の言葉を話すし、二足歩行をするし、たま  
 に猪口ちよこで酒を呑のんでいたりもするが、それ以外は猫  
 と同じに見える。食生活だって同じでいいだろうに。

秀一はふと思いついてズボンのポケットを探った。  
 「今日学校で、猫を飼かつてるクラスメイトから猫エ  
 サもらつたんだ。おやつに食くう？」

ポケットからカリカリの試供品しきうひん袋を出して、タ  
 ビの前に置く。タビは非常に不本意な表情で、鯖ト  
 ラの可愛い猫の写真おとが載のつたパッケージへ目を向け  
 る。

「だから、私は猫ではない」

「じゃ、これは駅前の野良猫のらねこにやるか」

取りあげようとすると、タビはさつと袋を前脚で  
 押さえた。

「しようがない。いただこう」

そう言いつて、彼は袋をくわえると、ご機嫌ごきげんな様子

で尾を立てて歩いていく。

何だかだ言っても、「やつぱ猫じゃん」と思いながら、秀一は手早く魚焼き器に鯖の切り身を並べた。「目目連。焦げないように見ておいて。着替えてくる」

ばちばちと無数の目が壁でまたたく。目目連は目の妖怪で、この家に憑いているものらしい。おかげで家の中ではどこであつても、その監視の目から逃れることはできない。

性別があるのかどうかは不明だが、しばしば風呂場を覗かれる。覗き趣味と関わりのある妖怪らしいが、勘弁して欲しい。

廊下を歩きながら秀一は、妖怪に囲まれてあたりまえのように暮らしている自分に気づいた。慣れとは恐ろしいもので、秀一にはすっかりこれが普通の生活と化している。

けれど以前はただ居心地よく感じていたこの生活が、最近少しだけ息苦しかった。それはきっと、自

分という存在がふわふわとした、不確かなものだと気づいたからだ。

秀一は自分が——カガミの血筋というのが——何者なのか知らない。ただの人間であるのか、妖怪にさえ害を為す、何か違う存在なのか。

自室へ戻った秀一は鞆を投げ出し、上着を脱いでハンガーにかけた。ネクタイを外し、カッターシャツの上にセーターを被りながら部屋を見回す。

四畳半の狭い部屋には、彼がやってきた当初は文机があっただけだったが、今ではCDプレーヤーがある。貯めた小遣いで買ったのだ。机の上には数枚のCDと、本が並んでいる。中には神宮寺が貸してくれた妖怪事典もあつた。服を仕舞うためのプラスチック製の引き出しがついた収納と布団は、押し入れの中だ。

ふと文机に目を向けた。その引き出しには、袱紗に包まれた《姫神の魔鏡》が入っている。何気なく手を伸ばそうとして、はっとした。

一月ほど前、屍食鬼グールに襲おそわれた。怪我けがをした血のついた手で鏡を触った瞬間、拒絶きよぜつするように光った鏡面は曇くもってしまった。

どうしたらいいのかわからず、結局そのまま仕舞つてある。

——このままだと、何かあったら、またジンさんに迷惑めいわくかけちゃうよな……。

秀一は存在するだけで、厄災やくさいを招く。

これまでも数度、危険な目に遭あった。そのたび神宮寺に助けられてはいるけれど……。

自分の所為せゐで誰かが傷つくのを見るのは、けつして楽しいことではない。

身体に負おつた怪我は治つても、心の中に残った棘とげのようなものは、なかなか消えてくれないから。

「……やば。そろそろ戻らないと」

気を取り直した秀一が台所へ向かって歩いていくと、何やら話し声が聞こえてきた。

「あのね、おさかなはもうひっくりかえすんだよ」

「へいへい」

話しているのは照覚寺の住職である神宮寺と木霊だ。茶の間へちゃぶ台の上を片付けに行つた木霊が、ごろごろしていた神宮寺を連れて来たようだ。

がたがたと魚焼き器を開ける音がする。

簡単に焼き魚が作れるようにと、久美の幼なじみである棚橋陽子たなはしやうこが激安で手に入れてくれたものだ。

まだ料理のレパートリーが少ない秀一のため、わざわざ探してくれたのだろう。

秀一はありがたく彼女の好意を受け取った。世話好きな彼女は、本当の姉のように秀一のことを可愛がつてくれている。

「ジン、おみそしるは、ちゃんとまぜないとだめなんだよ」

「おまえ案外口うるさいなあ」

「だって、おみそがたまると、またどかーんってばくはつしちゃうよ」

台所を覗くと、朝作っておいた味噌汁みそじゆを神宮寺が

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。